

解釈に導入し、非時間的「今」の「始めの端と終り端の一致」を、永遠における「始原と終焉の同一」としてとらえなおし、さらに「生成と存在の同一」を介して、瞬間における不断の創造・出生を導き出し、「本質的始原論」を構築したと理解できる。その「始原」は「永遠の第一の単一なる今」として、神の像である魂の最内奥、「魂の根底」の概念にそっくり映し込まれているということがわかるのである。

### クザーヌスの認識論と宇宙論

——〈否定神学〉を可能にするもの——

島田勝巳

本発表では、ニコラウス・クザーヌス(Nicolaus Cusanus 一四〇一—一四六四)の代表作、*De docta ignorantia*(= *DDI* 一四四〇)を中心に取り上げ、そこで展開される認識論と宇宙論、および両者の関連性について検討することで、クザーヌスの否定神学思想が、その認識論と宇宙論との独自の内的連関を基盤として成立するものであることを論じる。

神をめぐる議論におけるクザーヌスの関心は、その存在証明にはなく、むしろ存在論的前提としての神についての想像力を喚起させる試みに置かれていたと言える。彼は伝統的に神と呼ばれてきたものを「最大なるもの」(*maximum*)と呼び、「一なるもの」(*unum*)、「存在性」(*entitas*)、「絶対的なもの」(*absolutum*)、「無限なるもの」(*infinitum*)などの概念を神

に互換可能な概念として捉える。さらに注目すべきは、それが「厳密には把握し得ない」という認識論的性質において、「真理」(*veritas*)や「事物の何性」(*quidditas rerum*)をも無限なるものとして、その外延においては神の概念にほぼ等しいものとみなしている。おそらくこの洞察に、クザーヌス思想の〈否定神学〉的性格のもつとも斬新かつ重要な視点が表れている。神と事物との本質的な内的連関についてのこの洞察は、のちに汎神論の嫌疑をかけられることになる。だがもちろんそれは、事物の何性が神と存在論的な意味においても同義であることを意味するものではない。

この問題は、*DDI*第二巻の宇宙論において取り上げられている。クザーヌスによれば、神は被造物の原因・根拠でありながらも、「存在の形相」として、被造物とはその形相を異にする。被造物の側からすれば、自らは神に対して何も付与し得ない一方で、その存在はすべて神を原因とし、神から来ている。その意味で、被造物は神の「付在」(*adesse*)ではなく、むしろ「からの存在」(*ab esse*)にほかならないとされる。

クザーヌスは神と被造物とのこうした関係性について、さらに「縮限」(*contractio*)の概念を用いて示そうとする。そこでは、宇宙(*universum*)を介した神の個物(被造物)への自己限定という事態が捉えられることになる。だが、クザーヌス自身も警告するように、ここで語られる神と宇宙との関係を、新プラトン主義的なヒエラルキー的イメージで理解すべきではない。クザーヌスにとって、对象的に存在するのは被造物たる個々の事物であり、宇宙は神と個々の被造物との媒介を果

たすものとして位置づけられる。そこにはさらに、宇宙の絶対的何性 (quidditas absoluta) としての神と、その縮限された何性 (quidditas contracta) としての宇宙という規定が与えられる。

この点に関し、クザーヌスは次のような例を挙げて説明する。絶対的何性が神自身であるということから、太陽の絶対的何性は月の絶対的何性とは別のものではあり得ない。その一方で、太陽の縮限的何性は月の縮限的何性とは別である。というのも、事物の絶対的何性は事物それ自体ではないが、事物の縮限的何性は事物それ自体にはかならないからである。つまりクザーヌスにとって、宇宙はその縮限的何性を、完全にその絶対的な原因・根拠としての神に依拠しているのであり、またそれが同時に、具体的・対象的な事物の規定の本質を成しているのである。

以上のような論点から、神のみならず、事物の何性をも厳密には把握不可能とするクザーヌスの見解が、単に人間知性の能力の限界という認識論的側面のみに基づくものではないということが明らかにされる。むしろそこには、宇宙の縮限的何性を介し、事物・個物が絶対的何性を自らの原因・根拠とするという、いわば宇宙論的あるいは形而上学的根拠があるとと言えるであろう。

## 聖女／魔女考

——西洋中・近世の魔女言説から——

黒川正剛

西洋中・近世のキリスト教社会における女性イメージを「聖女」と「魔女」の二極分解・二項対立の関係性のもとで捉えることは人口に膾炙していると言えるだろう。本発表の目的は、その関係性の具体的内実を同時代の文献・画像史料を検討することによって明らかにすることにある。

中世末から近世にかけて猛威をふるった魔女狩りに大きな影響を与えたドミニコ会士の異端審問官ハインリヒ・クラームルが中心となって著した『魔女の槌』(一四八六年初版。本発表では一五八〇年出版のラテン語版を使用)は、女性嫌悪・女性誹謗の書として一般的に知られている。しかし同書では「称賛されるべき善い女」「聖女」についても論じられており、その記述内容と魔女についてのそれを比較することによって、聖女と魔女の二極分解の関係性の内実を知ることができる。『魔女の槌』はユデイト、デボラ、エステルなど聖書の中で国や民族を救う役割を果たした女性たち、また聖母マリアを始めとする聖女を称賛されるべき女性として挙げている。しかしその一方で「当代においては、経験が示すように」、「不誠実が男よりも女に多く現れている」と述べ、女性一般を魔女と結び付けている。このような記述内容から、次のような聖女と魔女の特徴と関係性を読み取ることができる。すなわち、称賛されるべき女